

の經を始めてけり、○下略

○按ズルニ、祈富ノ事ハ、尙ホ神祇部祈禳篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

〔宇治拾遺物語〕五、これもいまはむかし、伏見修理大夫俊綱のもとへ、殿上人廿人計おしよせたりけるに、俄にさはぎけり、さかなものとりあへず、沈地の机に時のものども、いろくた、おしはかるべし、さかづきたびくになりて、おのくたはふれ出ける、厩にくる馬の額少えろきを廿疋たてたりけり、移のくら廿具鞍かけにかけたりけり、殿上人酔みだれて、おのくこの馬にうつしのくらをきてのせて返しにけり、つとめてさても昨日いみじくえたるものかなといひて、いざまたおしよせんと云て、又廿人おしよせたりければ、このたびはさる體にして、俄なるさまはきのふにかはりて、すびつをかざりたりけり、厩をみれば、黒栗毛なる馬をぞ廿疋までたてたりける、これも額白かりけり、大かたかばかりの人共なかりけり、これは宇治殿の御子におはしけり、されどもきんたちおほくおはしましければ、橘俊遠といひて、世の中の徳人ありけり、その子になしてかゝるさまの人にぞ、なさせたまふたりけるとぞ、

致富

〔常陸風土記〕古老曰、昔祖神尊巡行諸神之處、到駿河國福慈岳、卒遇日暮、請欲寓宿、此時富慈神答曰、新粟初嘗、家内諱忌、今日之間冀許不堪、於是祖神尊恨泣、嘗曰、即汝親何不欲宿、汝所居山、生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲、人民不登、飲食勿奠者、更登筑波岳、亦請容止、此時筑波神答曰、今夜雖粟嘗、不敢不奉尊旨矣、爰設飲食、敬拜祇承、於是祖神尊歡然語曰、愛乎我胤、巍哉神宮、天地並齊、日月共同、人民集賀、飲食豐富、代々無絶、日々彌榮、千秋万歳、遊樂不窮者、是以福慈岳常雪、不得登臨、其筑波岳往來、歌舞飲喫、至于今不絶也、

〔竹取物語〕今はむかし、竹とりの翁といふものありけり、野山にまじりて竹をとりつ、萬の事につかひけり、名をばさぬきの宮つことなむいひける、其竹の中に本光る竹なむ一すぢ有けり、あ